
墮落の報酬

滝龍太郎

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

墮落の報酬

【Nコード】

N0732J

【作者名】

滝龍太郎

【あらすじ】

五歳の男の子が誘拐された。

犯人は身代金を要求し、警察は指図通り犯人の車と前後して関越高速道路を下った。

途中、受け渡し場所を指定され、身代金だけを取られて子供は帰らず、犯人を取り逃がしてしまう。

この誘拐は仕組まれたものであったが、仕組んだ者の意図は、単に子供を返すものだけではなかった。

八月八日午後八時五十五分。木村、石上両刑事は、関越自動車道下り所沢インターを過ぎた辺りを走っていた。犯人の指定は下りの三芳パーキングエリアで、午後十時に金を持って来いとの指図だった。

事件の概要は、八月八日午前十時頃、練馬区春日町の小林高一郎の長男、英雄五歳が母親のちよつとした隙にだれかに連れ去られたものだった。そして、その一時間後、犯人から小林高一郎さんの家に身代金要求の電話が入った。要求は現金三千万円を今日の午後十時に、関越自動車道下り三芳パーキングエリアに持って来いという内容であった。犯人は携帯電話で連絡を取るから一緒に持って来いと指図した。小林さん夫婦は悩んだ末、警察に連絡した。

「その携帯電話の番号は教えたのですね」

松山警部は、小林夫妻の心を落ち着かせるように静かに言った。

「はい」

父親はうなだれて返事をした。

「あなたが携帯電話を持っていることを知っていたわけですね」

「そういう感じでした」

「犯人の声に聞き覚えは？」

「いや、全くありません」

「最近、仕事で何か変わったことはありませんでしたか？」

「別にないです」

父親が目を伏せた。

「奥さんに聞きますが・・・」

松山が、うなだれている奥さんの顔を凝視した。

「最近、近所で不審な人を見かけたとか、そのような噂はありませんでしたか？」

「はい。・・・ありません」

奥さんが弱々しく言った。

「お気持は分かりますが、そんなに悲観してはいけません」

松山は思い余って言った。

「必ず我々が捕まえて、英雄ちゃんを取り返しますから。そんなに悲観しないで下さい」

「ええ」

夫婦は小さく頷いた。

小林高一郎、四十歳。親の経営する不動産会社で専務として君臨している。その小林不動産は、ビルの管理やらアパートの斡旋など、賃貸業務を主体としてやっているため、景気が悪いとはいえ確実に業績を伸ばしていた。

今回の事件は、そんな事情を良く知つての犯行に思われる。

「まず九時に、木村君と石上君は三芳パーキングエリアに行つて様子を見てもらいたい。それから中尾君は九時十分に入る」

黒板に三芳パーキングエリアの全体図が貼つてある。松山はその上に一台の車を置いた。

「木村君たちの車は出口近くに止めて待機する。そして中尾君の車は、中央の出やすい場所に駐車して見張る」

松山は、中尾刑事の車を中央の駐車場に置いた。

「そして、宮本君は九時半に、なるべく手前の駐車場に止め、何食わぬ顔をして建物の中を見て来てほしい」

「はい」

宮本刑事が応えた。

「小林さんの車は、九時五十分頃パーキングエリアに入ってもらつ。そして、その後を私が尾ける」

「その場で三千万円と交換に子供をくれるんですかね？」

石上が聞いた。

「分からない。そこまで聞く前に電話は切れたらしい。後は全て携帯電話に連絡するというから、三芳パーキングエリアから他へ行かされるかも知れないな」

松山が、関越自動車道の地図を見た。

「次は川越インターですね」

中尾が言った。

「その次が鶴ヶ島インター、そして東松山インター。どこで降りられるか、それによって犯人の土地勘が大体分かるな」

木村が言った。

「三芳でそのまますんなりとは行かないだろう。次のパーキングエリアかも知れないし、下に降ろされるかも知れないので、埼玉県警の方には応援を要請してある」

松山が黒板を見ながら言った。

犯人は、小林高一郎のことを良く知っている人物に違いないと、松山は小林不動産を、角度を変えて洗ってみた。それによると、噂通り会社の業績はまあまあで、業界仲間からも別段これといって変な噂はなかった。

小林不動産は、池袋の西口から僅かな所に三階建の自社ビルを構えていた。従業員は社長を入れて六名の小じんまりとした会社だが、地元の利を生かし、かなりの数のビルやアパートを管理している。従業員は、この業界では出入りが多いらしいが、小林不動産ではここ三年ばかり落ち着いていた。

会社との意見が合わず、退社した後何らかの形で会社に被害をもたらずケースがよくあるが、三年も出入りがないというので松山はとりあえず外に目を向けた。

取引の相手方、小林不動産に出入りする同業者、建築関係の人などを調べた。そして、小林高一郎の交友関係、父親である社長太一の交友関係までも調べた。

春日町の小林家のある周辺は、閑静な住宅街でひっそりとしている。夏休みで幼稚園が休みのため、朝九時を過ぎると公園には子供

連れの主婦が集まって来る。子供たちは砂場やブランコや自転車に乗って遊んでいる。母親たちはそんな光景を見ながら話が弾むのである。

小林親子は今日も同じように九時過ぎに公園に行き、英雄ちゃんは大助ちゃんと一緒に自転車で公園の中を走っていた。母親たちは公園内を見渡せる場所でお喋りをしながら目で子供たちの姿を追っている。

ところが、公園の隅に一ヶ所大きな木が何本もあり、自転車で遊んでいるとその木の外側を通り一瞬見えなくなる所がある。その死角に大助ちゃんが先に入り、後から英雄ちゃんが入って行った。ところが反対側から出て来たのは大助ちゃんだけで、英雄ちゃんは中々出て来なかった。転んだのかないと思いきや最初はだれも気にしていなかったが、あまりにも遅いので心配になり、母親が駆けつけたところ自転車が倒れており、英雄ちゃんの姿はなかった。

柵の向う側は道路で、もしやと思い道路に出て見たが英雄ちゃんの姿はなく、みんなで付近を手分けして探したが見つからなかった。そして、身代金要求の電話が入り、営利誘拐事件発生ということで本庁から松山警部が飛んで来たのである。

2

ルルルル。

「はい」

高一郎はすぐに受話器のボタンを押した。

「金は持って来ただろうな」

犯人からである。

「ああ、持って来た。英雄は？」

「そうあわてるな。大丈夫だ」

犯人は落ち着いた声で言った。

「今どの辺だ？」

「所沢インターを過ぎた辺りだが」

高一郎が言った。

九時四十分。後一、二分で三芳パーキングエリアに着く。

「そうか。一人だな」

「もちろん」

「変な小細工をしたらどうなるか、分かってるな」

犯人が念を押した。

「分かってる」

高一郎が答えた。

「よし、じゃそのまま真つすぐに走れ」

「えっ！ 三芳パーキングじゃなく？」

「そつだ。そのまま走れ。又連絡する」

と言つて、犯人の電話は切れた。

高一郎はすぐに松山の携帯電話に連絡した。

「そうですか。分かりました。犯人の指示に従つて下さい」

案の定、他へ誘導した。

松山は三芳パーキングに居る全員に連絡すると共に、上田部長に連絡し、埼玉県警の応援を要請した。

木村、石上の車が先頭を走り、その後の高一郎の車、松山の車と続き、中尾の車と宮本の車がその後ろに続いた。

「宮本君は小林さんの車の五、六台前まで行つてくれ」

松山の指示が飛んだ。

「了解」

宮本が速度を上げた。

「中尾君は木村君たちの車まで行つて、その距離を保つてくれ」
「了解」

「木村君たちは中尾君が行ったら、徐々に速度を落として私の所まで来てほしい。例の事をやりながら」

「了解」

例の事とは、今走つてる中で自動車電話を付けている車、及び携

携帯電話で話している様子のある車のナンバーを本庁に連絡することであった。

埼玉県警は、各パーキングエリアとバス停に何人かの刑事を張り込ませた。犯人は高速道路の中か外か分からないので、高速道路に架かる陸橋にいる車まで調べた。

「どうだ？」

木村たちの車が松山の車のそばに来た。

「暗くて携帯電話を持っていかどうか分かりません。自動車電話の付いてる車は八台ほどありました」

「そうか。それでは先頭に出て、その先の方も同じようにやってくれ」

松山の指示が飛んだ。

木村たちの車は速度をぐんぐん上げ、松山の視界から見えなくなつた。松山の車は川越インターを過ぎ、鶴ヶ島インターを過ぎた。

三台前に高一郎の運転する車がある。

ルルルル。

「はい」

「今どこだ」

犯人から連絡が来た。

「高坂のパーキングエリアを過ぎたところだ」

「そうか。それでは次の東松山インターで降りろ。そして熊谷方面に行け」

「分かった。指示に従うから早く英雄を帰してほしい」

「俺の言う通りにしていれば大丈夫だ」

と言つて電話は切れた。

高一郎は松山に報告し、東松山インターを降り熊谷方面に向かった。木村、石上の車は先に降り、森林公園の付近を走っていた。中尾の車は森林公園の駅へ行つた。宮本の車は公園の南入口へ向かつた。松山は高一郎の百メートルほど後ろを走っている。ルルルル。

「はい」

犯人からだ。

「その道を真つすぐ走ると森林公園の西入口という看板が出て来る。そこに入って入口のところにいろ」

それだけ言くと、電話は切れた。

その旨を松山に伝えた。

「全員西入口だ！ 周囲を囲めろ！」

松山の声が飛んだ。

県警の覆面パトカーも西入口に向かった。

木村と石上は西入口の手前で車を降り、目を凝らしながら近づいた。そこへ高一郎の車が入って行った。西入口の出口の方には、宮本がそつと待機した。中尾はその出口の先で待機した。松山は高一郎が入って行ったのを見て、入口を塞いで止めた。

ルルルル。

「はい」

「そこで止まれ」

犯人は高一郎の車が見えているかのように指示して来た。

「金を持って公園の中へ入って来い。早くだ！」

高一郎は早くと言われ、見られている感じがしたので松山に連絡できなかった。でも、高一郎の姿は木村と石上がはっきりと見えている。

高一郎は入場券の自動販売機を過ぎ、公園の中に入って行った。

携帯電話は切れてなく、耳にあてたままだ。

暗闇に薄ぼんやりと高一郎の姿が見える。木村は木の陰に入りながら高一郎との距離を縮めて行った。

「そこに置け」

高一郎が噴水のそばに来た時、犯人が言った。

「英雄は？」

「心配すんな」

「英雄と交換だ！ 頼む！」

高一郎が叫んだ。

「金を置け。早くそこに置け！」

「英雄を……」

高一郎が悲痛な声を出した。

「そこに置いて早く行け！ さもないと子供の命は保証しないぞ！」

高一郎はやむなく三千万円の入ったバッグを置き、

「英雄を……必ず返してくれ」

と、涙声で受話器に言った。

「大丈夫だ。約束する」

高一郎がそこから離れた。と、同時にバリバリというバイクの音がして、覆面をした人物が一瞬のうちにバッグを持ち去って行った。

「しまった！」

木村と石上は急いで走って来たが、バイクは公園の中に逃げ込んでしまった。

「警部、犯人はバイクで公園の中へ逃げ込みました」

「何！」

松山はしまったと思った。まさかバイクで来るとは思わなかった。てつきり車だと思って出入口を塞いでいたのだが、バイクでは公園の中に逃げ込めることができる。

松山も、以前息子を連れて森林公園に来たことがある。駅前で自転車借り、公園の中に入るのだが、中はとても広く一周するのに骨が折れたのを覚えている。

バイクだとゲートじゃない所でも外に出ることができるかも知れない。松山は県警の応援を頼み、森林公園封鎖作戦に出た。そして、公園の中を白バイで隈なく探した。

しかし、広い森林公園では周囲を囲んだといっても、漏れる隙間があり過ぎて犯人を逃がしてしまった。鉄条網の一ヶ所が切られてあり、そこから外に逃げ出したようである。

英雄ちゃんの解放は当然なかった。

捜査本部は重い空気に包まれていた。

「君は今回のことをどう思うかね」

上田部長が松山に言った。

「はい。犯人は用意周到な男で、森林公園付近の地理を熟知してる者だと思います。あれだけの警察官で封鎖していたのを難なく突破したのですから」

松山は森林公園の地図を頭の中に描いた。

「あの時、男は一人。英雄ちゃんは連れて来てなかった。小林さんは何度も子供のことを聞いたが、心配すんな大丈夫だからと言われ、バッグを置いてしまった。子供と引き換えにと思っていたが、早く置かないと子供の命はないと脅されやむなく置くと、すぐにバイクの音がして持つて行ってしまった。犯人は最初から子供を渡す気はなく、金だけを取る目的で小林さんを操って森林公園まで来させたのです。最初は三芳パーキングエリアと指定し、携帯電話を持たせその都度指示を出す。本人だけでなく、警察をも欺くためにやった行為です」

「警察が尾けていたことは知っていたのか？」

上田が厳しい顔で松山を見た。

「知っていたと思います。もしそうでなければ、わざわざ森林公園までおびき出さないと思います。それこそ途中のバス停にでも置いとけと指示があってもおかしくないわけです」

松山は鑑識からの書類を見て言った。

「逃げ出したと思われる公園内の切られていた鉄条網は、やはりペンチのようなものでつい最近切られたものです」

バイクの特定。逃走経路の分析。三芳パーキングエリアから東松山インターに着くまでの間に、自動車電話を搭載していた車は全部で十二台、その持ち主への調査。ただ実際はバイクに乗っていたので期待はあまりできないが。それと、小林さんの携帯電話につけて

おいた録音機から、犯人の声紋鑑定をしているところだと、松山は説明した。

上田は松山を信頼すべく頷いた。

事件から一週間が過ぎた。連日の聞き込みにもこれといったものが浮かび上がって来ない。目撃者はかなりいると思っていたが、その公園にいた人も、近くにいた人もはっきりとは何も見ていない。一緒に遊んでいた大助ちゃんも先を走っていたので何も見てはいなかった。死角の中での出来事だけに、目撃情報が皆無に等しかった。森林公園の状況も同じだった。付近は人家が疎らな場所で、目撃した人は未だに出て来ない。バイクの特定に至っては、マフラーの音と小林さんが暗い中での目撃した形と、僅かなタイヤ跡からの追跡ではなかなか難しい。

そして、小林不動産の出入り関係者、及び社長と息子高一郎の交友関係もまだ調査中だが、これといった人物は浮かび上がって来ない。

唯一犯人像の輪郭が浮かび上がって来たのは声紋鑑定の結果だけで、やや小太りの三十代の男性ということだった。ただ受話器にハンカチのようなものを被せて喋っている感じなので、それ以上の詳しい特徴は把握できなかった。

松山は焦った。犯人を追い詰めておきながら取り逃がしてしまっただことが悔しくてたまらなかった。まして英雄ちゃんが今どうしているか何も分からないのである。あれ以来、犯人からの連絡は何もないが、もう一度金を要求して来るに違いない。今までの松山の経験からそう来ると信じている。

「木村君」

松山は森林公園に隣接する街を地図の上で追った。

「一度や二度の下見で森林公園の中の道を覚え・・・なおかつ出てから逃げる道を把握するには相当に知ってる者だと思うが・・・」

松山が間をおいて喋った。

「不動産というのがちょっと引つ掛かるんだ」

「と言いますと」

「この森林公園の周辺は、不動産の下火と共に宅地開発は影を潜めてしまった。今やこの不景気では、金儲けなら何でもやってやろうという人間がかなりいるんじゃないかな」

「そうですね。この不景気では家どころではないですからね」

木村は自分にあてはめて言った。

「不動産業の人なら地理は得意だ。まして地元の人なら裏道もななんてことはない」

「それかも知れませんか。小林不動産の噂をどこからか聞いて、いっちょやってやろうと」

中尾が言った。

「うん。あり得るな」

木村が中尾の言葉に頷いた。

「小林不動産と直接関係がなくても、中尾君の言う通り仲間内から噂を聞き、計画を練った可能性があるかも知れないな」

松山が言った。

「そうですね。奴は初めから三芳パーキングなんか居ないで森林公園に居た。途中を車で走っているのかと思いましたが、該当者はなかったですからね。最初から森林公園におびき寄せるつもりだったのです。つまりそこが自分のテリトリーで土地カンがあっただすよ」

木村が言った。

「あの辺の地理を詳しく知っている者、金に困っている者、逆に最近金回りが良くなった者、小太りの三十代の男、バイクが上手い者、それと単独犯の可能性がある。独り住まいの者も入れとこう。以上のことを重点に周辺の不動産屋を当たろう」

松山が動いた。

木村と石上は逃走方面と思われる熊谷市。中尾と宮本は隣の東松山市。松山は埼玉県警に協力してもらい、それ以外の街の不動産屋を当たった。どこの街の不動産屋も不景気のせい暇で、捜査に対して協力的だった。

どここのだれは日頃からうつぶんが溜まっていて、近いうちに何かやらかすんじゃないかと。急に金回りが良くなって毎晩飲み歩いている者とか。色々な噂話を交えてかなりの数の人物が上がった。名前だけや勤め先の分からない者なども含めその数は六十余名になった。その一つ一つを潰すために、松山たちは手分けして自宅や勤務先などを訪ね歩いた。八月八日のアribaとその裏付けにかなりの日数を費やした。

その結果、六十余名中七名以外の人物の確認が取れ、それらは白として捜査から外された。その七名については居所が分からず、聞いた人物から再度詳細を尋ね、糸口を辿り寄せることにした。

江口浩平。四十歳くらいで、東松山市のS不動産に半年前まで居た。市内でたまに見かけるといふ。自称ブローカー。

吉野と言う名の四十歳くらいのブローカー。あちこちに現れるが居所は不明。

築地誠。三十五歳くらいで、坂戸市のM不動産に居たが倒産してどこへ行ったか分からない。

小野一郎。三十歳くらいで築地の友人。築地といつも一緒に居た。居所不明。

仁野と言う名の五十歳くらいのブローカー。熊谷市に居るといふ噂がある。

板垣進。三十歳くらいで、森林公園駅前のO商事に居たが二ヶ月前に倒産、行方知れず。暴力的な男。

川又鉄二。四十歳くらいで川越市のA商事に居たがその社長と喧嘩し、暴力をふるって退社。その後の行方は不明。

以上の七名が何かやらしそうな行方知れずの人物たちである。特に暴力的なものに訴えて事件を起こしそうな人物は、板垣進と川又鉄二だと言う。松山たちは、この七名の立ち寄りそうな所を徹底的に洗い出すことにした。

「何の連絡もなしか」

松山は声を落として言った。

「全然です」

木村が小林家に居る捜査員からの連絡を伝えた。

「犯人は子供を解放しないところをみますと、もう一度やると思うんですけどね」

宮本が言った。

「そう期待してるんだが・・・」

松山は鑑識からの報告書を見ながら喋った。

「バイクは特定できなかったが、音などから推測するには二百五十CCではないかという結果が来ている。テープからは、三十代のやや太った感じの人物というのは前と同じだ。この七人の中で写真のある江口、築地、小野、川又の四人を見ると、確かに小太りであるが」

松山はそれぞれの会社や友人から、社員旅行へ行った時の写真などを借りていた。

「後の三人については、吉野も板垣も仁野も痩せている部類に入ります。まして最近見かけたという吉野は、ますます痩せていたというのでこれは　だ。そして板垣の会社は二ヶ月前に倒産して行方知れずなので、尚更痩せているだろう。これもとりあえず　だ」

松山は黒板に書いてある七人の内、吉野と板垣の上に　を付けた。そこに中尾が戻って来た。

「小林不動産は去年脱税容疑で国税局に摘発されてます」

中尾は小林不動産の最近の五年間をあらゆる分野から調べていた。「何の脱税だ？」

松山が聞いた。

「所得税です」

中尾が手帳を見て言った。

「一昨年の五月十二日、鶴ヶ島市の山林と宅地合わせて九千七百六十平方メートル、金額で十三億二千万円の土地を斡旋し、手数料を双方から七千九百二十万円貰った。しかし、他に不動産業者が二つ入っていて三等分したということで、三分の一の二千六百四十万円の申告をしたのだが、たれこみがありまして国税局が動きました。その結果、二つの不動産業者というのは嘘で、それぞれ個人の領収証が出ていました。しかし、その二人は違う不動産会社に勤めており、偽証の疑いがあると国税局は二人を調査した。額面二千六百四十万円の領収証は確かにその二人が書いたものに違いはないが、この土地を持って来た本人なのに手にしたお金はそれぞれ二百万円とということでした」

「それはひどい！」

宮本が言った。

「その二人の人物は？」

松山が聞いた。

「当時坂戸のM不動産に勤務していた築地誠と、小野一郎という名前です」

「何！」

松山が大声を出した。

「これだよ！ この二人だよ！」

松山は黒板の名前を叩いた。

「二人は二百万円でも良かったのかも知れないが、国税局の調査が入ったので冗談じゃないということで小林不動産を脅しにかけたのかも知れませんね」

宮本が言った。

「あり得るな」

松山は、灰皿から落ちそうになったタバコを消した。

「二人の住所は？」

「築地は鶴ヶ島市で、小野は東松山市です。当時の住所ですが」
「構わん！ 鶴ヶ島と東松山だ。手分けして行ってくれ！」
松山は、一つの糸口を発見した感じがした。

5

鶴ヶ島市脚折町。関越自動車道の鶴ヶ島インターを出て、車で一、二分の閑静な住宅街であった。

築地誠のアパートは中々見つからず、近所の酒屋で聞いたがそんな名前のアパートはないと言う。住所を言うと、

「ああ、思い出した。そのアパートは去年の夏に燃えてしまい、今は普通の家が建っています」

酒屋のご主人が思い出してくれ、その場所を教えてくれた。何度も通り過ぎた場所であった。そこに戻り番地を確認した。

「確かに酒屋の言う通り、普通の家が建ってるな」

木村はその大きな家を見て言った。木村は車を降り、その家の玄関に向かった。宮本は鶴ヶ島市役所に行き、築地誠の住民台帳を調べた。当時のにも住民登録はなく、どこから来たものかどこへ行ったものかさっぱり分からなかった。

一方、中尾と石上は東松山市の小野一郎の家に向かっていた。住所は東松山市唐子。関越自動車道の東松山インターを出て、車で十分ほど走った当たりで、周囲は田畑が広がっていた。番地を追って行くと、畑の真ん中にぽつんと三軒ばかりの家が建っていた。手前の二軒は違う表札がかかっており、中尾と石上は一番奥の家に足を進めた。

その家は表札がなく、家の回りは構うことなく乱雑に物が置かれていた。

「ごめんください」

中尾がインターホンを押して声をかけたが、何の返事も返ってこなかった。玄関のノブを回したが、鍵がかかっていた。その脇の駐

車場には車がなく、庭の方に回った石上は、窓越しから声をかけた。それでも一向に返事はなく、人の居る気配がまるでない。庭も手入れがしておらず、草は伸び放題に伸びており石上の腰の当たりまできていた。

「住んでる気配がまるでないですね」

石上が表に回り中尾に言った。

「そんな感じだな。でもメーターは回ってるから丸っきりの空き家ではなさそうだ」

中尾が電気メーターに指をさした。

「冷蔵庫には物が入っているんですね」

「たまに來ているのだろう」

石上はメーターの数字を手帳に書き写した。

「ただ寝に帰って來てるって感じだな。庭も何も構わずにだ……」

中尾はぶつぶつ言いながら、

「向こう頼む」

と言って隣の家に行った。

隣家二軒の話を総合すると、この家は確かに小野一郎の家で三年ほど前から住んでいて、以前は奥さんと子供が居たのだが半年前に前に居なくなり、今は小野一郎一人で住んでいる。それから帰って來たり來なかつたりで、いつもひっそりとしている。最近では一昨日の夜に車を見たと言う。小野一郎の近所での評判は、ごく普通のサラリーマン風であり、別段何の迷惑もかけてないとのことである。

これで小野一郎の所在が分かった。

後他の五名の内、江口浩平、仁野政治、板垣進の三人は居所が分かり、アリバイ照合の結果、白と分かった。

これで捜査の対象は四人に絞られた。特に容疑濃厚な築地誠と小野一郎の二人を重点的に絞ることとなった。

その夜、中尾と石上は小野の家を張り込んだ。そして、夜中の0

時過ぎ、小野らしい人物が帰って来た。車が駐車場に入り、ドアを開けた。真っ暗で良く見えない。人の輪郭が黒く見えるだけで、顔は全然分らない。その男は何も知らず、玄関を開け中に入り明かりを点けた。

「よし、行こう」

中尾と石上が小野の家に向かった。

中尾はインターホンを押した。しかし、何の返答もない。こんな夜中に訪問されたので出ないのだろうか、それとも風呂にでも入ってしまったて聞こえないのか、中尾はなおも押し続けた。

ピンポン、ピンポン。

静寂の中、インターホンの音が辺り一面にこだまするかのように広がった。石上は庭の方に回ってみた。中尾は玄関の前に立ち、内側で息を殺して躊躇している気配を感じていた。おそらくドアスコープで中尾の顔を見ているに違いない。真夜中である、無理もないことである。中尾はインターホンを押すのをやめ、ドアを軽くノックした。

コンコン。

「小野さん」

近所の手前、小さな声で言った。

「はい」

ようやく中から返事がした。あまり躊躇しててもおかしいものだと気がついたのか、返事が返ってきた。

「こんな夜中に申し訳ありませんが、あなたを待ってたものですか」

「どちらさん？」

「警察です。ちょっと聞きたいことがあります」

「疲れてるので明日にしてくれ」

ぶっきらぼうに返ってきた。

「いや、時間は取らせません。ちょっとでいいのです」

一拍沈黙の後、ドアが開いた。

「夜分すみません」

中尾は頭を下げた。

「小野一郎さんですね」

「いや」

首を振った。

「でもここは小野さんの家ですよ」

「確かにここは小野の家ですが、小野は居ません」

「どちらへ？」

中尾が小野の所在を聞いた。

「さあ」

何も知らないという顔をした。

「あなたは？」

「小野の友達ですが、それが何か？」

不満そうな顔をした。

「名前は？」

中尾が手帳を出した。

「言わなくてははいけないんですか？　こんな夜中に人の家に来て、

名前を教えると言うんですか？」

「いや、小野さんに聞きたいことがあったのですが、居ないとなるとどこへ行ったのか教えてもらわなければならぬし、現に小野さんが居なくて違う人が居るのですから、その人の名前を聞くのは当然です。」

中尾が食い下がった。

「築地です」

ぼそりと言った。

その言葉に中尾は角度を変えて、その人物の顔を見た。電気を背にして立っているの顔が暗くて良く分からなかったが、角度を変えて見ると確かに写真で見た顔である。

「築地誠さんですね」

「そうです」

「小野さんと一緒にあなたも探していたところなのです」
「私を？」

築地が怪訝な顔をした。

中尾はある事件の参考でと、八月八日の居所を聞いた。その日は築地の誕生日で、東松山市内のスナックで午後五時から夜中の二時頃まで飲んでいた。仲間七、八人での誕生パーティーである。その中に小野も居たという。

「小野さんは何時ごろ来ましたか？」
石上が聞いた。

「六時頃に顔を出して、用があるからと言って確か一時間くらいで帰ったと思うけど」

築地はうる覚えながら記憶を辿った。

「その後は？」

中尾が聞いた。

「来なかった」

「あなたは夜中の二時頃までずっとそこに居たのですね」

「ええ、居ました」

「一步も出ず？」

石上がしつこく聞いた。

「そうです。なんならその時の仲間に聞いてみて下さい」

築地が苛立つて言った。

「分かりました。そうします」

石上はスナックの場所と仲間の居所を聞いた。

「ところで、あなたは小野さんの家に泊り込んでいるのですか？」

中尾が聞いた。

「ええ。行くところがないもんで」

築地は頭を掻いた。

「いつから泊っているんですか？ 小野さんは」

中尾が矢継ぎ早に質問した。

「一昨日の朝パチンコ屋で会いまして、何日か出張するので使って

いいと鍵を貰ったんだが……」

「それは何時頃？」

「開店して間もなくだから十時過ぎですね」

「そのパチンコ屋は、あなたがいつも行くところなのですね」

「そうです」

「その時、小野さんはどんな格好をしてましたか？ 旅行に行くよ
うなとか」

「いつもの格好ですね。ブローカーをやっていますと、たまに遠く
の物件を見に行くことがあるので、そうだと思います。旅行ではな
いと思いますが」

「何か気づいたことはありませんか？」

中尾がそう聞くと、

「あいつ、何かやっただんですか？」

と、築地は不安な顔になった。

「いや、参考に調べているだけです」

「それならいいけど、最近不景気ですからね。そういえば……
少し慌ててたみたいだったけど、言われてみるとそう思えるな」

「そうですか。最後にもう一つ聞きたいのですが、あなたはオート
バイが好きですか？」

中尾が築地の顔を凝視して聞いた。

「いや、全然です。丸つきり乗ったことはありません」

築地は首を振った。

「小野さんは？」

石上が聞いた。

「あいつも乗ったところを見た時はないな」

「一回もですか？」

「ええ」

この言葉が、ただ単にオートバイに乗らないと言い切れない。
当然築地にしても同じことが言える。

築地誠のアリバイは正しかった。声紋も犯人のものとは一致しなかった。

こうなると、小野一郎が一番疑わしくなってきた。

八月八日の当日、東松山市のスナックで午後五時から築地誠の誕生パーティが行われ、仲間である小野一郎は六時頃に顔を出し、来た証しを作り七時頃にスナックを出ている。そして、その後の小野の足取りは分かっていない。もし、小野が犯人であれば時間的には間に合う。それと、小野は携帯電話を持っていなかったというが、どこかで買ったか借りたかしたに違いない。

宮本と石上は、東松山市及びその周辺の携帯電話を取り扱っている店を当たった。

吉野と川又鉄二の二人については未だ何の情報もなかった。

一方、中尾は引き続き小林不動産の個人的なものまで詳しく調べていた。取引先の付き合いやら、噂話まで聞き込み、かなりの情報を知り得た。

それによると、社長である小林太一氏は温厚な人柄で、不動産業者の間では何一つ非難される事はなく実直な人物であった。ところが、専務である息子の高一郎は親の恩恵に預かりながら、陰では好き勝手なことをしている事実が分かった。

高一郎は、会社には内緒で悪どいことをやっており、随分と泣いている人もいて、その中ではいつか仕返しをしてやろうという人物も何人かいた。そして、毎晩のように飲み歩いてその派手さは目を見張るものがあつた。愛人を囲っているという噂もあり、賭け麻雀で相当の借金があることも分かった。表向きは品行方正に見えるが、一步裏に回ると、とんでもない人物であつた。

中尾から報告を受けた松山は、まさかという顔をして目を剥いた。「最近はどうだ？」

松山が聞いた。

「英雄ちゃんが誘拐された後、何日かはしおらしくしていたが、最近では又飲み歩ってます。やり切れない気持を紛らわすために飲み歩いていると言ってるらしいのですけど、あるクラブのママは、口で言ってるほど滅入ってないんじゃないかと言っていました」

中尾が言った。

「ほう、それは興味があるな。小林高一郎の心理分析をしてみたいな」

松山は何かピンとくるものがあつた。

「いつも一人で飲みに行ってるのか？」

「いや、若い女と一緒にみたいです」

「若い女が」

松山が腕組みをした。

「麻雀の方は？」

「仲間で打ってるみたいです」

「危ない連中じゃないだろうな」

「まだそこまでは分かっておりません。それと借金の額もまだ調査中です」

「そうか。何かありそうだな」

松山は顔を曇らせた。

そこに、木村から連絡が入った。

「警部！ 繋がりました」

木村が興奮して言った。

「川又鉄二ですが、高一郎とは高校の同級生でした」
「何！」

松山は小躍りした。

吉野と川又鉄二の二人を追っていた木村は、川又鉄二と小林高一郎との間柄を掴んだ。

「川又が四十歳くらいというので、高一郎と同じ年格好と思い高一郎の小、中、高、大と全部調べたら、高校の卒業アルバムに川又鉄二の名前があつたのです」

木村は興奮してるせいか早口で言った。

「そうか、ご苦労」

「今から川又の住所地へ行つて来ます」

「場所はどこだ？」

「足立です」

松山は色々と読めてきた。

小野一郎、川又鉄二、そして小林高一郎。この三人が今回の事件で、何かの線で繋がっていると考えている。

7

川又鉄二の家は現在もその住所地にあつた。そこには年老いた夫婦に鉄二の兄夫婦とその子供二人が住んで居た。そして、鉄二は居なかつた。兄嫁の話では年に一、二度寄るだけで、どこに住んでるか何をしてるかも知らないと言う。

署内では、松山が一つの仮説を立て、図式を黒板に書いた。

小林高一郎の借金。

ブローカーで高校の時の同級生川又鉄二。

高一郎と仕事で知り合った小野一郎。

高一郎は自分の遊びで多額の借金を作り、これを何とか穴埋めしようとして、自分の息子を誘拐して社長である親から金をせしめようと考えた。そこで同級生である川又鉄二に相談し、犯行に及んだ。

いや、まてよ。小野はどうした。川又と小野はどこで繋がるんだ？ 松山は小野が犯人であると確信している。それなのに二人の繋がりが出て来ない。自分の仮説の中で腑に落ちない点が出てきた。

その後の調べで、八月八日の当日、東松山市の隣、坂戸市内のレンタル店から小野名義で携帯電話を貸し出していた事実を掴んだ。返却日は翌日の九日昼過ぎ、本人が直接返しに来ている。その時の免許証のコピーを見て、自動二輪のあることを確かめた。そして、その住所地に宮本と石上が向かつた。

一方、中尾は高一郎の出入りする雀荘から意外な事実を突き止めた。いつも出入りする雀荘は同じ不動産仲間で楽しく打っているが、高一郎はたまに違う雀荘で打っていることが分かった。それは暴力団関係の出入りする雀荘であつて、高一郎には二千万近い借金があつた。

そして、その相手は川又鉄二だと言つた。

「何！」

松山は驚いた。高一郎と川又が敵対していたとは。

「川又は町のチンピラで、いつも高一郎に付きまといていたみたいです。そして、川又はよく高一郎に借金の返済を迫っていたらしいです」

中尾が雀荘のマスターから詳しく聞いてきた。

「ところがここ一週間、川又の姿はなく、二日前に高一郎が来て川又の居所を聞いたそうです」

「それだ！」

松山が大声を出した。頭の中でまとまらなかった図式ができてきた。

「川又は高一郎から借金を返して貰ったのでどこかに旅行にでも行ったのだらう。高一郎が川又の居所を聞きに来たのは金を受け取ったかの確認と、子供の居所を聞きに来たに違いない」

松山の推理が冴えてきた。

「じゃ高一郎と川又が仕組んだ芝居ですか？」

中尾はびつくりした。

そんな中尾を見て、松山が腕組みして言った。

「そこに小野もつるんでいる。川又が英雄ちゃんを誘拐し、愛人かどこかの女の所に英雄ちゃんを隠す。小野は犯人になりすまし、警察を欺きながら土地カンのある森林公園までおびき寄せる。そして、高一郎はさも被害者のように振る舞い、三千万円の現金を取られるようにする」

「そして、小野から川又に金が渡り、小野は分け前を貰ってドロソ。

そして、英雄ちゃんを何げなく返す。こつこつ筋書きですね」

中尾も分かってきた。

「ところが金は渡ってるはずなのに英雄ちゃんは一向に帰って来ない。心配した高一郎は川又を探すべく雀荘に行った。でも川又の姿はなく、高一郎は青くなつて探し歩く」

松山は自分の推理が正しいと思った。

「英雄ちゃんをどこに隠したんでしょね」

「分からん……。人里離れた所だろう。とにかく高一郎をしょうびこつ」

松山は、理由は何でもよいと思った。

8

松山と中尾は高一郎の家に向かった。

途中、宮本から無線が入った。

「警部大変です！」

宮本が慌てた声で言った。

「小野が、小野一郎が殺されていました」

「何だと！」

小野の免許証に書かれていた住所地に、宮本と石上は行った。その家はどこにもあるような平屋の貸家で、窓には全て雨戸が閉まっていた。

近所で聞いてみると、しばらくだれも来ておらず、たまに腐った臭いがすると言う。それを聞いた宮本と石上は、玄関の戸を破り中に入った。そこには腐乱した男の死体があった。持っていた免許証から小野と分かった。

松山はスピードを上げた。

そこに、今度は木村から無線が入った。

「川又が軽井沢に行くという情報が入りました」

「だれかの別荘か？」

「そこまでは分かりません」

「そうか」

松山は、おおその見当がついてきた。

「今、宮本君から連絡があつて小野は殺されていた。恐らく川又の仕業だと思う」

松山は更にスピードを上げた。

高一郎の家はひっそりとしていた。松山はそんな静寂を破り、車から出ると急ぎ足で玄関のインターホンを押した。

「ご主人は？」

松山が聞いた。

「いません」

そつけない返事だつた。

「松山です。ちょっと話があるのですが」

すでに捜査員は引き払つていた。

「ご主人はどこへ行きました？」

松山は強い口調で言つた。

「別荘に行くと言つて出掛けました」

「いつ？」

「昨日です」

松山の強い口調に圧倒されたのか、即座に答えた。

「一人で、ですか？」

松山は声を落として聞いた。

「そうです。何かあつたのですか？」

奥さんは心配な顔付きをした。

「川又という男をご存じですか？」

松山が聞いた。

「いえ、知りません。その人が何か」

「いや、別に何でもないのですが。知らなければそれでいいです。ところでその別荘というのは軽井沢ですね」

「ええ」

奥さんはなぜ知ってるのかという顔をした。

松山はその場所を聞き、高一郎の居る別荘に向かった。

高一郎は、川又の居る雀荘に行き川又を探したが、居ないので軽井沢の別荘に向かったと思われる。

そこには川又と女と英雄ちゃん、そして高一郎が居るに違いない。

松山は上田部長に報告し、長野県警の応援を要請した。

9

旧軽井沢。そこは静かな佇まいをみせていた。

高一郎の別荘の中では、何も知らない英雄ちゃんが川又の女と遊んでいる。川又と高一郎はソファに座り、何事かを話している。

「小野を殺すことはないだろ」

高一郎が川又を叱った。

「あんな悪は殺さなければ俺たちがやばくなる」

川又が罵った。

「しかし、殺さなくてもいいだろう」

高一郎が頭を抱えた。

「あいつは三千万をネコババしようとしたんだぞ。そうはとんやがおろすかってんだ。だから殺したんだ。文句あるか！」

川又が高一郎に凄んでみせた。

元々高一郎の借金から仕組んだ芝居だった。川又への二千万の借金を返すために、親から騙し取るのを目的として自分の子供を誘拐し、成功した。子供も無事である。ただ一つ誤算だったのは、小野を殺したということだった。このまま子供が帰って来れば、世間も警察もだんだんと忘れかけてくれるんじゃないかと考えたが、一人殺されたとなればそうはいかない。

「何心配してんだよ。小野と俺たちとは何の繋がりもないんだから大丈夫だよ」

川又が高一郎を諭した。

「分かった。心配してもしようがないな。お前の言う通りだ。それより、英雄を早く返してやってくれ。うちの奴、半狂乱なんだ」

高一郎がそう言っても川又は黙っている。

「どうした？」

高一郎が聞いた。

「子供は返さない」

川又がボソリと言った。

「なんだって！」

高一郎が立ち上がった。

「小野から聞いたよ。しこたま儲けてるらしいな」

川又がニヤリと笑った。

高一郎はゾクツとした。

「人殺しまでやらされたんだ。もう一回身代金を貰っても悪くはないだろう」

「約束が違う！」

高一郎が怒鳴った。

「俺は約束した覚えはない。ただ子供をかくまって金を貰う約束はしたがな。俺が後ちよつと遅れたら小野の野郎にとんずらされるどころだった。俺の金まで持ってな。だから俺は奴を殺したんだよ。最後のセリフを聞いてからな」

川又が、またニヤリとした。

高一郎はビクツとして、身構えた。

「大した同級生だよ。罪を俺に全部なすり付け、金まで取り上げようとするんだから。一番の悪はお前だ！」

川又が高一郎に飛び掛かった。

その時、玄関のチャイムが鳴った。外には松山たちが取り囲んでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0732j/>

墮落の報酬

2010年10月8日15時25分発行